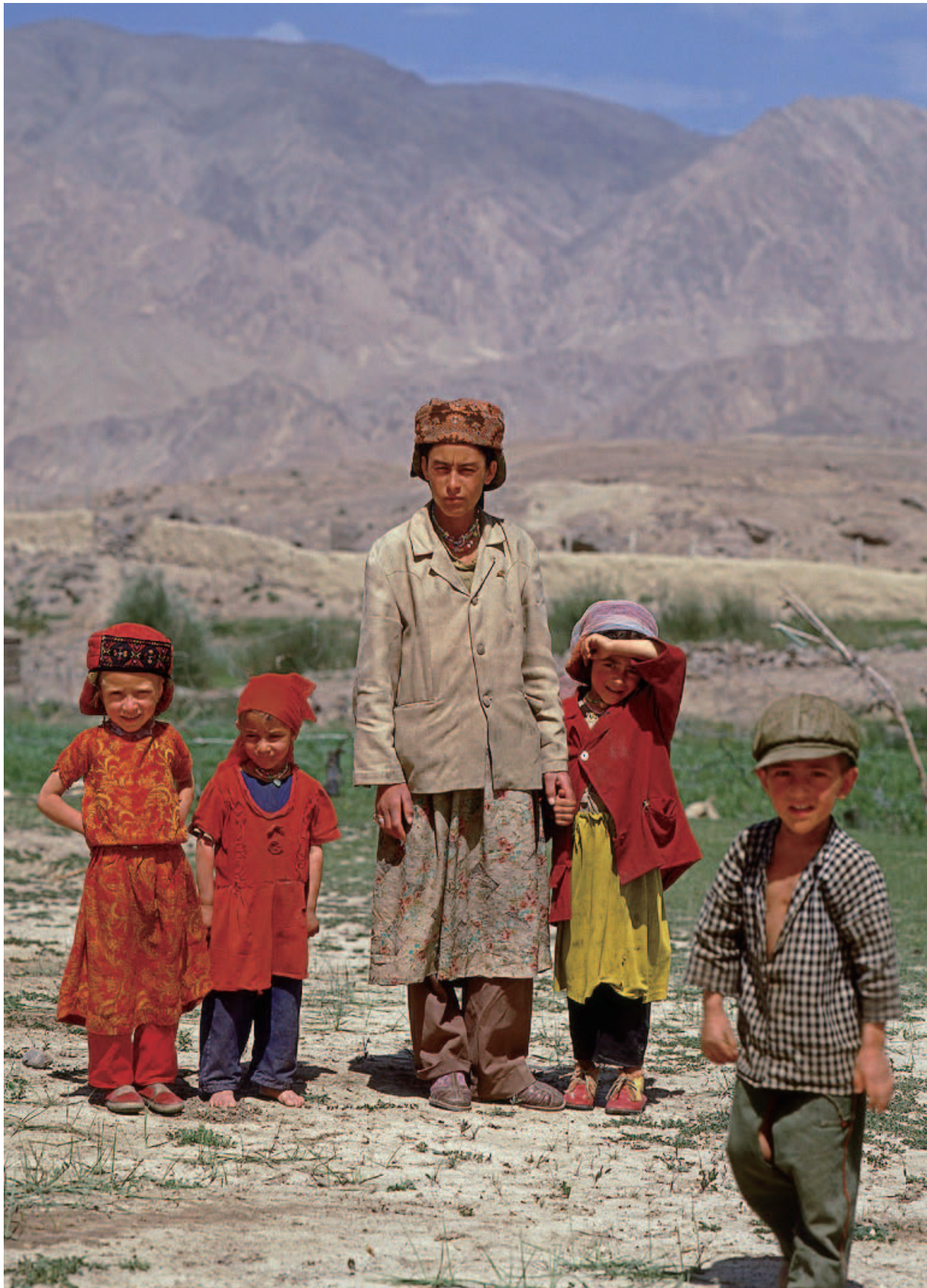




188号  
2013/ 11/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」  
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli-san.com/>  
Eメール:[wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)  
◆「わんりい」HPのアドレスが上記になりました。



「タシククルガンで暮らす」 新疆ウイグル自治区にて、1986年8月6日 撮影  
新疆ウイグル自治区南部に在るタシククルガン(32000)の集落で暮らすタジク族の母娘と、娘たちの友達です。「集落」と書きましたので不審に思われたかも知れませんが、この写真撮影の1986年頃は町と言つには抵抗がある大きめの集落でした。当時は見聞きで言葉や風俗が全部タジクで、僅かに中国風の饅頭が市場の隅で売られているのを発見して驚いた位でした。若い男が真つ黒な羊を抱いて、ベットにしている様にも文化の違いを感じ、「中国は広い、全く異質な民族を抱え込んでいる」の印象を持った事を今でも覚えています。  
(四姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川 健三)

(11月号の目次は、最終ページに掲載しております)

2020年のオリンピック開催地が東京に決定しましたが、皆様はどんな感想を持たれましたか？2回目ともなると、その賛否は一様ではないでしょう。オリンピックを初めて開催する時は、どの都市も、それを都市、更には国家の発展の起爆剤と捉えて、インフラ整備やモラルの向上などを図り、それなりの効果を挙げて来ました。1964年の東京オリンピックでも、都内の高速道路が整備され、公衆トイレがきれいになり、新幹線が開通して、日本という国が、それまでよりも格段に垢抜けた国家に成長したと言う印象を受けました。

2008年の北京オリンピックもそうでした。丁度、中国の経済力が飛躍的に伸び始めた頃と重なって、2004年頃からはあちこちでオリンピックに向けた工事が始まりました。もともと建設計画はあったのですが、オリンピック開催決定で期限が定まり、弾みがついたようです。道中いろいろあり、計画・工事の進め方に一部批判があったり、工事が予定より遅れて心配したりしましたが、何とか間に合って、無事に開催できました。

唯、観光客の側から見ると、北京の代表的な繁華街、前門の建設が間に合わなかったのは残念でした。前門一帯をすっかり造成し直す大規模工事でしたから、オリンピックまでには完成が間に合わず、大柵欄と言うごく一部分だけが営業している、寂しい前門でした。いっその事、街並み改造はしないで、昔のままの前門で観光客を迎えたほうが良かったのではないかと思ったのは、私だけではなかったようです。

完成後の前門に行ってみると、建物の外装こそ、くすんだ灰色のレンガ造りで、古い雰囲気は出していますが、出店したのはブランドショップが多く、昔からあった有名な食堂・工芸品店等は数えるほどしか戻って来ていませんでした。前門も王府井と同じような街並みになって、北京らしさが失われたようで、とても残念です。

閑話休題。北京市は2008年のオリンピックを成功裡に終了し、続くパラリンピックも万事うまく運んだようです。実は、2008年のオリンピックが北京で開催されると決まった時、オリンピックのこと

は心配していましたが、続くパラリンピックが北京で開催できるのか、ちょっと心配になりました。それまで私は、北京の街中で身障者の方を見かけたことはありませんでした。北京の街は、身障者の方が一人で出歩くには適していないと感じていたので、この街でパラリンピックが開催できるだろうかと失礼なことを思ったのでした。

日本でも以前は、商店の品物が狭い歩道にはみ出し、身障者の方々には歩き辛いと問題になりましたが、北京の場合は、歩道の障害物ではなく、路面が平らでないことが問題で、目の不自由な方や車椅子の方にとって、外出は大変そうでした。また、幅の広い道路の横断は、地下道や歩道橋が多くて、皆階段でしたから、車椅子使用者には不便でした。

以前にもお話ししましたが、住んでいる近くの路地に、人が一人やっと通れる幅の歩道が出来て、その歩道の上に点字ブロックが取り付けられました。オリンピックの準備としては随分早い時期だったので、行き届いた工事だと感心したのですが、そのブロックを辿っていくと、歩道の真ん中に立った電信柱にぶつかってしまったのです。歩道の右側には高い塀が続いており、塀と電信柱との間には、人が通れるような隙間はありません。仕方なく車道に下りて、電信柱の向こう側へ行くと、点字ブロックが電信柱の根元から再び続いていました。点字ブロックでは、車道に降りるようにとのサインもありませんでした。目の不自由な方がこの道を歩いたら、電信柱にぶつかって、その後どうしたら良いか途方に暮れてしまうでしょう。外にも、気をつけてみると、身障者の方には随分危険な場所がありました。それで、北京では身障者の方が安心して活動できないと勝手に心配したのですが、これは杞憂に終わりました。北京市は、必要な所はきちんと押さえて、海外からの身障者の方にも通用するバリアフリーを完成させたようでした。

北京市も、インフラの面では、オリンピックを機に、皆が住み易い街に変身を遂げたようです。あとは、今話題の、大気汚染を克服して、健康的な都市になることが緊急の課題でしょう。

# 喪家の狗

私の調べた諺・慣用句 24

三澤 統

今回は、こうはなりたくないという慣用句ですが、人間長い人生のうちにはいろいろなことに会うものです。ときには失意のあまり意気消沈し身も心もぼろぼろになってしまうこともあります。受験に落ちたとき、恋人に振られてしまったとき、株で失敗したとき、伴侶に先立たれたときなど、挙げればきりがありません。

そのような人を評して「まるで喪家の狗のようだ。」と言います。

辞書では次のように載っています。

## ▲小学館 デジタル大辞典：

「喪家の狗〈孔子家語・困誓から〉不幸のあった家で、家人が悲しみのあまりえさをやるのを忘れ、元気のなくなった犬。転じて、ひどくやつれて元気がない人。一説に、宿なしになった犬の意とも」

## ▲小学館 日中辞典：

「喪家之犬 sàng jiā zhī quǎn 飼い主をなくしたイヌ； 寄る辺のない人； 志を得ず落ちぶれた人、喪家の狗」

以下、あの孔子が“喪家の狗”のようだと呼ばれてしまったエピソードです。この成語の出自は〈史記・孔子世家〉の「累累若喪家之狗」(疲れきって喪家の狗のようだ)の部分です。

孔子<sup>注1)</sup>は三十才の時に私学を開設し、門徒を広く集め、五十才に達してやっと魯国の君主によって中都宰に任命されました。その後相次いで司空や司寇等の官職の任務を担当したこともありましたが、魯国の君主は孔子のことを特別に重要視していたわけではありませんでした。

そのため孔子は魯国でなかなか自分の思い通りにならず、政治の才能も発揮できませんでしたので、しばらくして弟子たちを連れて魯国を去りました。

その後孔子の一行は衛、陳、宋などの国を相次いで回りましたが、どの国も孔子の政治方面での建議を聞き入れようとはしませんでした。次いで鄭国にたどり着いたのですが、鄭国の都の東門のあたりで、孔子と弟子たちがはぐれてばらばらになってしまい、孔子は城門の下で一人さびしく待っているしかありま

せんでした。

弟子のひとりの子貢は孔子が見えなくなったので、焦って探し回っていると、一人の鄭国人に遇ったので「あなたは私の先生に会いませんでしたか？」と尋ねるとその人は「東門の外で一人の老人が佇んでいましたよ。なんか様子はとても風変わりで、おでこは堯帝(三皇五帝<sup>注2)</sup>のひとり)、首は皐陶(神の名)に似ていて、肩は子産(孔子よりやや早く出た鄭の賢相)の様でしたが、腰から下は禹(三皇五帝のひとり)に似ていましたね。何だかひどく意気消沈していた様子で、喪家の狗とそっくりでしたよ。まあ、その方があなたの先生かどうかは私は知りませんが」と言って去ってゆきました。

子貢は急いで東門にやって来て、孔子を探し当てると、鄭国の人と話したことを孔子に伝えました。孔子はそれを聞いて「ワハハ……」と大笑いして「私が、その男が言う誰彼に似ているというのは正確かどうか分からないが、喪家の狗というのは、全くその通りだよ」と言いました。

## 〈注記〉

### 1) 孔子 [前552 ~前479]

中国、春秋時代の学者・思想家。魯の陬邑(山東省曲阜)に生まれる。早くから才徳をもって知られ、壮年になって魯に仕えたが、のち官を辞して諸国を遍歴し、十数年間諸侯に仁の道を説いて回った。儒教の祖。言行録「論語」がある。

(Goo辞書より抜粋)

### 2) 三皇五帝

中国の神話伝説時代の帝王。現在ではこれらは実在の人物とは考えられていない。三皇は神、五帝は聖人としての性格を持つとされた。

(ウィキペディアより)



このようにして槐安国の国王の娘と結婚した淳は、心の奥深くで父親のことを懐かしく思いつつも新婚の妻と穏やかな生活を送りはじめましたが、淳の妻は、夫が父親のことで心が晴れないでいると察し、父でもある国王に相談しました。

「お父上様、どうしたら良いでしょうか？ 淳さまの心を晴らすために何か仕事をさせて頂くのは如何でしょうか？」

国王は、淳を呼んで訊きました。

「仕事をして貰いところがあるのだから頼めまいか。実は南柯郡太守のポストは今空いているのだ。そなたにやって貰えまいかと思っているがどうであろうの？」

「政治について私はなにも分かりませんが宜しいでしょうか？」

淳の妻は夫を励まして言いました。

「何事もして見なくてはいつまでも分かるようにならないのではないのでしょうか？ 挑戦してみても如何でしょうか？」

「わしは、そなたがなかなかの政治的能力を持っていると感じている。南柯郡はいろいろ問題が生じて、これまでの太守を免職にした。そなたに任せよう！ 娘もそなたと共に行くのだから、二人で力を合わせて行けばよいと思っておるがどうであろうか？」

と、国王は言い、王妃も

「そうですとも。二人で相談し合えばきっとうまく行きますよ」

と勧めました。

淳は謹んで、国王の命令を拝受し、国王は役人に命じて太守としての仕事内容を伝えると共に、長旅に必要なものをいろいろと準備させました。併せて黄金、珠玉、絹、錦、車、馬、日常生活の什器など取り揃えて万全な準備をし、十数人の従者も二人と共に任地に向かうことになりました。

出発にあたり、淳は国王に次のような上奏文を奉りました。

「私は政治を行う特別な才能もないにもかかわらずこのような大役を仰せつかることになりました。誠心誠意を以て任務にあたり、朝廷の綱紀を損なう

ことのないように誓います。と同時に、賢者、哲人を広く求めてほしいと願っております。そして力不足の私を補佐してもらえることができればこの上なく有難く嬉しいことと存じます」

「そなたの心に適う人物はおるかの？ 若しそのような人物がいるのであれば連れて行くがよい」

国王の言葉を聞いた淳は、

「私の古い友人で、周弁と田子華と申す者がおります。周君は忠誠心の厚い人物でこの国の警察官を勤めております。国の法を遵守して誤ることなく私を補佐してくれる筈の人物だと存じます。一方田君は慎み深い人物ですが、政治に通暁しており、政務を託するに信用できると信じております。その二人が私と共に参れば、南柯郡は全て順調に治められると確信しております。なにとぞお願い申し上げます」

と国王に述べました。国王は快く淳の願いを聞き届け、二人を南柯郡へ派遣してくれることになりました。

出発の日、国王と王妃は都のはずれまで見送りに出、国王は淳に別れる際に次のように言いました。

「南柯郡はわが国の中でも大きい郡だ。土地は肥沃であり、人々は素朴で正直である。是非とも慈悲深い政治で治めて欲しい」

王妃もまた、

「妻として夫にきちんと仕えられれば、私は何も心配しないでいられます。南柯郡はそんなに遠くはないけど、何時また会えるか分かりません」

と、娘を教えさとしながら涙を流しました。

※※※※※

このようにして淳とその妻は国王と王妃に別れを告げ、従者を従えて馬に乗り、遙か南の国の任地へと出立しました。途中数泊もすると、行く手に立派な城郭が見えて来ました。近付くと「南柯郡城」という大きな扁額が城郭の入り口に掲げられ、いかにも立派な都にきたようです。そうです、南柯郡の都に到着したのです。

城郭の門に近づくと、下役の役人らしき者が門から走り出て来、深々とお辞儀をして、

「皆さまが既に集まっておられ、太守様の到着をお

待ち申しております」

と報告しました。

淳が城門の中を覗くと、城門の両側には南柯郡の役人や、僧侶や、地元の長老等身分が高いとおぼしい人物たちが多数並んで恭しく出迎えに出ておりました。

案内人が先頭に立ち城門を通り抜けると、城内は祭でも行われていたかのように、至る所で太鼓が叩かれ、鐘が鳴らされ、音楽が奏され、人々が溢れ出ており町中に目出たい雰囲気漂っています。淳は深く感動し、必ず国王の期待に背かないよう、民衆の希望に応える政治を行おうと心の中で誓いました。

着任後しばらくすると、淳は先ずは町中を歩き回って人々の生活をつぶさに視察し、貧困や病気で苦しむ人々を救うための施策を施し、南柯郡の政治・経済を立て直すべく南柯郡の政務に励みました。また、淳と共に南柯郡を任地として赴いた周弁、田子華の二人も、共に優れた政治的能力を持つ人物なので、それぞれに国の要所を担当して貰い、淳は南柯

郡の政治、経済、治安の凡てに亘って心を配り治めて行きました。

淳の賢明で、寛容な政治・経済の政策の下で、郡の人々の生活は安定し豊かになり、郡は見る見るうちに繁栄して行きました。そして、歳月は瞬く間に過ぎて去り、淳は郡の太守として間もなく二十年になろうとしました。この間、郡の人々は淳の功德を褒めたたえ、その功績を石碑に刻み、生きながら神のように崇め又慕いました。

国王も淳の業績を喜び、更に領土や爵位を賜り、宰相の地位まで与え、周弁と田子華の政治的な功績も大きく、二人の名前も広く知られ、国王と淳の二人に対する信頼も厚く、次々と昇進して行きました。

そして淳夫妻は、五男二女に恵まれ、息子たちや、娘たちはきちんとした教育のもと、それぞれ立派に成人しました。息子たちは重要な官職に就き、娘たちは王族の家に嫁ぎ、家族は南柯郡の輝かしい一族として、槐安国かいあんこくの中で比べるものがない存在で知られるようになりました。

(続く)

## 智子の雑記帳 97

### 映画「そして父になる」を観て

「6年間育てた息子は、他人の子でした」

ショッキングなコピーのこの映画は、第66回カンヌ国際映画祭審査員賞を受賞し、話題となった。「福山雅治」「子ども」というキーワードが私の検索エンジンに引っかかり、公開早々、観に行くことに。

病院での赤ん坊の取り違え、という事件を下敷きに、物語は進んでいく。小学校に上がるちょっと前に、自分の子が実は取り違えられた他人の子だった、という現実を前に、福山雅治が演じる主人公が「父親」になっていく話だ。

主人公である良多は、高層マンションに住み、仕事でも成功して、いわゆる「勝ち組」の人だ。だからこそ、競争心のない優しいおっとりした息子・慶多に歯がゆさを感じ、その子が自分の子でないと知ると、「そうか、やっぱり」と、つぶやいてしまう。

もう一方は、郊外の電気屋で、妹と弟、祖父と両親の大家族。生活は大変そうだが、笑い声は絶えない家庭である。そういえば、子どもの頃、同じ団

地にこんな家があって、いつも近所の子どもたちで溢れていたような。

良多は、嫌な奴で、人の心の機微が分からない。自信満々で、育てた子と実の子二人を引き取ろうと決める。相手の家は「どうせ電気屋」とどこかで思っていて、いざとなればお金で解決できる、と。雑談ついでに、二人とも引き取りたい、金なら用意すると提案し、相手の家族は逆上、妻はドン引き、巡り巡って、「成功者」であったはずの自分は、父親として欠陥品であったことを思い知らされる。

「そして父になる」のタイトルは秀逸だ。子どもの葛藤が表現されていないという批判もあるかもしれないが、ここでフォーカスされているのは、己を振り返ることのなかった男が、事件をきっかけに、父親としてどう成長していくかだ。正解はないと言わんばかりに、この映画は「結論」を出さない。育てた子も、実の子も、どちらも選べない。大事な問題に、答えはない。ずっと抱えていくしかない。

(真中智子)

7月20日、大連北駅を出たときは低い雲が垂れ込めていたが、ハルピンに着くころには空はすっかり晴れ渡っていた。迎えに来てくれた友人に聞くと今日は気温が32度くらいまで上がり、明日も同じような天候だという。まったくこれでは避暑どころの騒ぎではない。大連は着いた翌日から小雨が降ったり止んだりで凌ぎやすかったが、ハルピンはかなり内陸にあるとは言え「いくらなんでも」と文句の一つも言いたくなる。これで真冬には零下30度になるというからこの地に住んでいる人に同情したくなる。

哈爾濱西駅からタクシーでまずホテルに向かう。予約したホテルは“IBIS ホテル”で中国名では“宜必思哈爾濱索菲亞教堂酒店”と長たらしい。住所は哈爾濱市道里区兆麟街92号である。小奇麗な部屋で空調も完備しているが、なぜか冷蔵庫はない。

ホテルの前の道路を挟んで鬱蒼と木々が生い茂る公園があった。地図で調べるとこれが「兆麟公園」で、友人によると抗日戦士として活躍した李兆麟(1910年～1946年)からその名をつけたとのこと。ホテルも彼の名をとった兆麟街にある。ホテルの隣の建物の一部には、兆麟記念館もあった。

彼は、遼寧省の生まれで、日中戦争時代主として東北地方、とりわけハルピン中心に抗日活動を展開。1946年に暗殺されたがその功績を称え公園の名前も兆麟公園に改め、この地に埋葬された。公園の中には記念碑と胸像が設置されている。今回ではじめて兆麟公園とその謂れを知ったのであるが、旅行社はいいいホテルを予約してくれたものだと感謝した。後述するが、市のシンボルである「中央大街」や「ソ

フィスカヤ寺院」にも歩いてすぐのところにある。中央大街を北に歩くと松花江やス大林(スターリン)公園に行きつく。

荷物を置いてまずはソフィスカヤ寺院に向かった。ホテルの中国名の一部に“索菲亞(ソフィア)教堂”とあるが、これがソフィスカヤ寺院のことである。この寺院を見るのは今回が3度目であるが、いつ見ても荘厳で美しい。高さ53メートルの巨大なタマネギ型のドーム屋根とそれを四方から守るかのようにつくられた三角錐の尖った屋根とのコントラストが素晴らしい。それぞれの屋根の先端には金色



ソフィア寺院の前で

の十字架が屹立している。焦茶色のレンガ造りの外壁に対して、紺碧のドーム屋根と尖塔の屋根、陽に映える金色の十字架は何度見ても飽きることがない。ビザンチン様式で建てられたロシア正教の教会であったが、現在は建築美術館として利用されている。中を見たかったが、行ったのが午後4時半過ぎですでに閉館となっていたのが残念であった。ロシア正教の教会は以前25か所を数えていたらしいが、現存しているのはこの教会とウクライナ寺院の2か所だけらしい。

なんども後を振り返りながら、中央大街に向かった。この通りも3度目である。ハルピンは1898年に帝政ロシアと清朝間で結ばれた「遼東半島租借条約」により、東清鉄道の敷設が許可されて以降、ロシアによる街づくり・鉄道づくりが始まった。ハルピンはその中心となって発展し、人口が急激に増加し一挙に近代都市に変貌した。欧米各国の企業も進出、現在も残る欧風建築が数多く建てられた。そして“東方のパリ”と呼ばれるようになった。それらの建物が多く残っているのが「中央大街」である。

当時はロシアが中心となって開発したのでこの通りは「キタイスカヤ通り」(ロシア語で“中国人街”との意味)と呼ばれた。新しく建てられた建物もいくつもあるが、全長約1500メートルもの通り全体がレトロな雰囲気余すところなく醸し出している。一つには通りがすべて石畳であること。それから都市条例で6階以上の建物が禁止されているためであろう。

日本はすこし進出が遅れたが、満州国(1932年建国)時代には多くの日本企業が進出した。バロック様式の旧松浦洋行のデパート(現在：新華書店)は、赤いドーム屋根のあるもので当時のハルピンでは一番高い建物であった。

この通りで最も有名な建物は、モデルンホテルである。1913年に創建されたが、ハルピナーの格式を誇り当時の人々の憧れの的であったようだ。全館を薄いピンクで装い、欧風なユニークなデザインである。正面玄関の上部には2階と3階にテラスが設けられ、そこから中央大街を行き交う人を眺められる。歌手の故淡谷のり子がハルピンに来るたびに泊まったそうで、孫文の妻の宋慶齡も名を連ねている。有名人の定宿だったようだ。今年で丁度築100周年を迎えるが、内部は2007年にリニューアルされ、さらに人気の高いホテルとなった。次回ハルピンに行く時は、必ずこのホテルに泊まりたい。

道の両側に次から次へと現れる歴史的建造物を楽しみながら北へ足を運ぶ。夕方6時になろうとしていたがまだ日は高い。中央大街が尽きるころ、左右に走る大通りを地下道でくぐって上に出ると前面に高さ20メートルはあろうか、筒状のモニュメントが見えてきた。筒の上方は何人かの人々の彫刻が乗っかっている。モニュメントを囲むように5メートルくらいの柱が半円状に等間隔に30本程度立っている広場に出た。

モニュメントの台座には、〈哈爾濱市人民防洪勝利記念塔〉と大きな文字で書かれたプレートが取り付けられていた。1957年に松花江が氾濫し、大きな被害が出たそうだ。その大洪水を記憶に留めるために造られたというが、自然災害でも何でも乗り切った時、「勝利」という言葉を使うのが好きな中国人らしいネーミングの記念塔である。



中央大街(キタイスカヤ通り)

すこし横道に逸れるが、帰国して1か月近く経った8月20日の朝日新聞を見て心配になった。その記事は、「中国東北地方で大雨被害」とあり、“8月19日までに東北三省で79人が死亡。ハルピンの松花江の水位の上昇が激しく被害拡大のおそれ”とあった。1か月前はあれほど天候に恵まれ、松花江は水を満々と湛えてはいたがまさかこのような状況になるうとは。無事を祈らずにはいられない。

記念塔の背後は松花江である。全長2308キロと長大であるが、最後はロシアのアムール河に合流する。北朝鮮との国境にある長白山(高さ2691メートル)が源流である。川幅はかなり広く水量も豊富である。中国の河川は日本のような急流は少なく、どこの大河もゆったりと流れている。ゆったりと流れるから大雨が降れば氾濫することが多いのであろう。

マイナス30℃となる真冬には、松花江は氷が張り歩いて渡れるようになるらしい。この大河が凍結したらさぞかし壮観であろう。川土手に立つとすぐ川面までコンクリートの長い階段が設けられている。今日は土曜日ということもあるのだろうが、たくさんの人が座っておしゃべりしている。どうやらここから夕陽が沈む美しい光景を見るためのようだ。松花江に沿って幅の広い緑地帯が上流に向かって1750メートルも続いている。これが斯大林(スターリン)公園である。さすがにここここにハルピンはロシアの影響を見ることができる。

これまでこの公園を散策する機会がなかったのでゆっくり歩く。しばらく歩くと川岸に屋根つきの100人は乗れるような観光船が停泊していて係り

の人がしきりに客寄せしている。聞くともうすぐ出航するというので急いで10元払って乗り込んだ。ハルピン市街を船上から見るのは結構なことであるし、何より川風に吹かれるのも気持ちがいい。丹東市に行った時も鴨緑江で船に乗ったが、船上から見る景色は陸上のそれとは全く違うものである。

船は岸を離れるとまず上流を目指した。頬を撫でる風が気持ちいい。川沿いにある建物は意匠を凝らしたものがいくつもあり、それを見ているだけでも面白い。明日行く予定の「太陽島」にはロープウェイで行く予定だが、その乗り場は欧州の中世のお城をまねたものでひときわ目につく。つまり対岸は緑に覆われた太陽島である。とても美しい。川の真ん中に船が進んだときハルピン市街の方向を眺めた。この時見た夢の中のような光景は忘れることができない。斯大林公園の美しい緑の奥に高層ビルが林立し、どこかの欧米の都市を見るようであった。ビルの上には、真っ白い満月に近い月がすこし赤みがかかって来た青空に懸っていた。

30分程度周遊した観光船が棧橋について陸に上がった時、夕陽が太陽島側の陸地に沈んだ。午後8時ころで東京では真っ暗な時間帯である。東京は東経139度に対しハルピンは東経127度であるから当然こうなる。沖縄(東経128度)よりまだ西にあるわけであるから。

さて、本稿の終わりにハルピンとユダヤ人について記しておきたい。前回の旅行の時、20世紀初頭から第二次世界大戦のころまでハルピンには多くのユダヤ人が住んでいたことを知った。なぜこの地にユダヤ人が住んでいたのか気になっていた。今回の旅でいろいろと知るところとなった。

ハルピン市は、1898年までは一寒村で人口は少なかった。それが前述の条約締結後に鉄道の敷設や住宅建設などで一気にロシア人が増加した。1914年には、3万4千人であったのが1925年頃には約9万3千人に増加した。これに対して日本人はわずか3千3百人であった。もうひとつの背景は、1917年のロシア革命を嫌った白系ロシア人がハルピンに押し寄せたのである。ユダヤ人は革命以前から入植していたが、帝政ロシアはユダヤ人の居住制限を厳しくしていったため、自由に居住できるハルピン市に逃れ、2万人にまで膨れ上がっていった。



遊覧船からハルピン市街を望む

ハルピンは、ロシア、中国、日本だけでなく欧米諸国の企業が多く進出し、国際都市の様相を呈してきたが、1940年前後までハルピン経済を支えたのはユダヤ人であったという。前述のモデルンホテルもユダヤ系ロシア人が経営にあたった。しかし、安住の地と思っていたハルピンも情勢が急変し、ハルピンのユダヤ人の大半は命からがらアメリカなどに移住し、安全の地を求めて行った。大きな要因は増加する白系ロシア人の中にユダヤ人を嫌う人が増えて、迫害が年を追うごとに厳しくなったからだという。苦難の道を経てようやく中東の地にイスラエルを建国したのは、1948年5月のことであった。

ハルピン市内には、ユダヤ人が住んでいた証がいくつ残っている。一つは、1918年に完成したユダヤ教の礼拝堂の「シナゴグ」である。キリスト教やイスラム教の礼拝堂と異なり、2階建て(一部3階建て)の、マッチ箱を大きくしたような建物である。白と茶色のコントラストが人々の目を引く。現在はユダヤ人の足跡を展示する施設となっている。またユダヤ人墓地には行けなかったが、2千人の御霊が眠っているようだ。墓標が整然と並んで、美しい墓地であるらしい。そのほかにも学校などが残っているが、中国人が別の用途で使用している。

ところで我々は第二次世界大戦時にリトアニアでビザを発給し、多くのユダヤ人を救った杉原千畝は知っている。しかし関東軍情報部長であった樋口少将が(紙面の関係で詳細は割愛するが)この地にいた2万人のユダヤ人が難民となり絶望の淵にいたとき、彼の独断でアメリカなどに逃れさせたことはあまり知られていないのではないかと。私も勿論知らなかった。エルサレムの丘には「黄金の碑」があるそうだが、ユダヤ人の偉人に混じって杉原千畝と樋口季一郎の名が刻まれているようだ。歴史の一断面であるが心に響くことである。

(続く)



「方正地区日本人公墓」と刻んである公墓の左隣に「麻山地区日本人公墓」がある。麻山は現在、黒竜江省鶏西市麻山区、省の東寄りロシアに近い所である。

1945年8月12日、ソ連軍に攻撃されたハタホ開拓団は絶望的な状況にあった。このままでは婦女子たちがソ連軍の凌辱に遭う。身近に迫った危機に、420名ほどの婦女子は団長とともに自決の道を選んだ。

麻山で散った女性たちの遺骨は野ざらしになっていた。戦後、遺族たちはなんとか遺骨を収集し慰霊したいと思っていた。遺族たちが哈達河会を結成し、1982年初めて鶏西市を訪れた。その時は大雨が続き、麻山に行かれず、翌年再度訪問し麻山を訪れたが、写真撮影も慰霊行事も許可されなかった。散乱する遺骨を前に再度、遺族たちは涙を吞んで帰国した。

その後、金丸千尋さん(方正友好交流の会顧問。敗戦後、人民解放軍に入り、ずっと日中友好運動に取り組んできた)らの努力によって遺骨収集が実現し、1984年中国政府はこの地に公墓を建立してくれた。それが麻山地区日本人公墓である。

この二つの公墓から数メートル離れた所に「中国養父母公墓」が立っている。“残留孤児”として育った遠藤勇さんは中国名「劉長河」として育ち、ハルビンでロシア語教師として生活していたが、おぼろげながらも両親の顔を思い、やっと実父の所在を確認し、文通を始め帰国申請した。しかし文革で挫折。日中国交回復後、帰国が実現、実父のいる岩手県岩泉町で過ごし、その後貿易会社を興し成功した。遠藤さんは自分が育った方正県を忘れず、中国人養父母を常に思い、欠かさず中国へ仕送りをしていた。

その養父が亡くなった後、遠藤さんは中国にいる日本人孤児たちを育てた養父母たちの安住の地を作ろうと養父母公墓建立を思い立った。当時の中国では墓地

を持てる人も少なく、遠藤さんは養父母たちへの報恩の気持ちを墓所建設にと思い中国側と交渉したが難航した。しかし「養父母たちへの報恩の気持ち」が中国側を納得させた。1995年8月「中国養父母公墓」の除幕式が行われ、遠藤さんは養母・呂桂雲と共に参列した。

この中国養父母公墓からまた数メートル離れたところに2004年9月、「藤原長作記念碑」が立った。藤原さんは1912年12月、岩手県沢内村で生まれた。「米作り日本一」として仰がれるほどの人だったが、減反政策で自ら作り出した水稻栽培技術が日本では不要になってきた。

中国の寒冷地でこそ藤原式稲作方法が役立つと1980年初訪中。そして翌年から方正県で実践、多大な成果を収めて東北全土から中国全土に藤原式稲作法が拡大した。故・岡崎嘉平太さんは、「中国に対する賠償に代わる大事業を成した」と称賛するほどの大仕事だった。

筆者自身2008年夏ハルビンで、王英春さん(当時、黒竜江省外事弁公室副主任)から「東北三省の人間は誰もが藤原さんの名前を知っている。おいしい白米が食べられるのは本当に藤原さんのお蔭だ」と聞いた時には、やはりそうかと改めて藤原さんの業績を実感したものだ。

友好の深い心をあらわすこのような石碑を囲んで中日友好園林がある。そこに方正日本人公墓が立っている。

(このシリーズは終わります)

**友好の原点を刻む中日友好園林**  
(方正日本人公墓とは何か③)  
**方正友好交流の会事務局長・大類善啓**  
おおるいよしひろ



中国人養父母公墓



藤原長作記念碑

**正友好交流の会**

**公墓の存在をより多くの人たちに伝えるべく、ぜひ会にご参加を!**

101-0052 千代田区神田小川町 3-6

(社)日中科学技術センター内

☎ 03-3295-0411

E-mail:ohrui@jcst.or.jp

- ◆ 個人会員会費、一口 1000 円  
(口数は最低一口、上限なし)
- ◆ 郵便振替口座番号 00130-5-426643  
加入者名方正友好交流の会



皆様、寒くなってきましたが、風邪を引かないよう十分気をつけてください。

最初、メイプルタウンフェスタという言葉さえ分からなかった私は今回実際に参加し、見学して、とても有意義な2日間でした。

今回の町民文化祭では中国展を行いました。展示品は中国の書と絵の掛け軸、切り絵、記念切手、観光地の入場券、古い漫画本、女性誌、中国版のセーラームーンアニメDVDなどです。2

日間で結構見学者が来ました。その時、私が説明したり、質問に答えたりもしました。展示室には今までの中国講座の資料も置きました。皆さんは中国講座にも興味津々で見えていました。一部のお客さんは講座資料の写真を見て、すぐにここは故宮、シルクロード、大雁塔などと言っていました。話によれば、中国が好きで、何回も中国に行きました。有名な北京、上海、西安、桂林などは勿論、中国の一番西のカシュガルまでも行ったそうです。やはり中国旅行が好きですね、感心しました。交流も出来て嬉しく思いました。中国講座の資料もたくさん持って行かれました。

就業改善センター二階大ホールには書道、俳句、短歌、水墨画の展示が行われました。恥ずかしいですが、私の書が二枚ありました。書と言えば、私は文化協会の書道教室に通っていました。文化祭に書が展示されるようにと指導の先生が何回も励ましてくださいました。日が近づくと先生はわざわざ手本も造ってくださいました。字体は私の好きな隸書曹全の碑で、ちょっと変わった字体ですが、内容は「曹全の碑」の中から取りました。手本がちょうど作品サイズで、臨書が凄く

便利になりました。繰り返し、繰り返し練習して、やっと出来上がりました。先生に見せ、「よく出来ました。」と褒められたけど、本当は手本よりだいたい差があると思います。でも展示は別として、展示のためによく練習し、少し上達しました。他の作品も4、5回も鑑賞しました。その時、また、何名かの書道の先生と知り合いました。短歌の先生も水墨画の先生も作品を紹介して、説明したりしてくださったので、よい勉強になりました。

この2日間でまた、足を伸ばして、体育館の方も見学しました。体育館は凄く人が多くて混んでいました。勿論、昼食は久しぶりの屋台、シャモックとか、焼き魚、蕎麦などで美味しかったです。

他にも色々見学、体験しました。とても充実した2日間でした。



最近、雪が降り始め、「冬のソナタ」の冬になってしまいました。風邪を引かないように怪我をしないようにお祈りいたします。

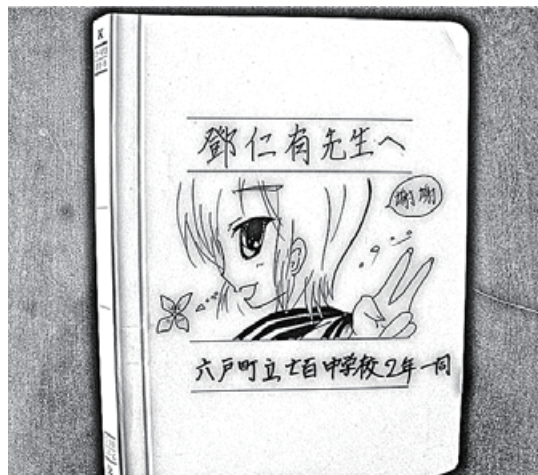
私はさる11月15日に七百中学校より中国講座の依頼をいただき漢詩の講座を行いました。依頼書によると、この学校の二年生は漢詩の勉強をされているところで、孟浩然の「春暁」、杜甫の「絶句」、李白の「黄鶴楼送孟浩然広陵」(黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之<sup>ゆ</sup>くを送る)この三首の漢詩は全中国では老

若男女に広く知られています。日本では中国の詩を全て「漢詩」と呼びますが、中国では具体的に唐の時代の詩を唐詩と呼んでいます。

準備は万端ではありませんでしたが、当日の10時に学校に行きました。普段は講座を行います、



七百中学校で漢詩の講座を行う



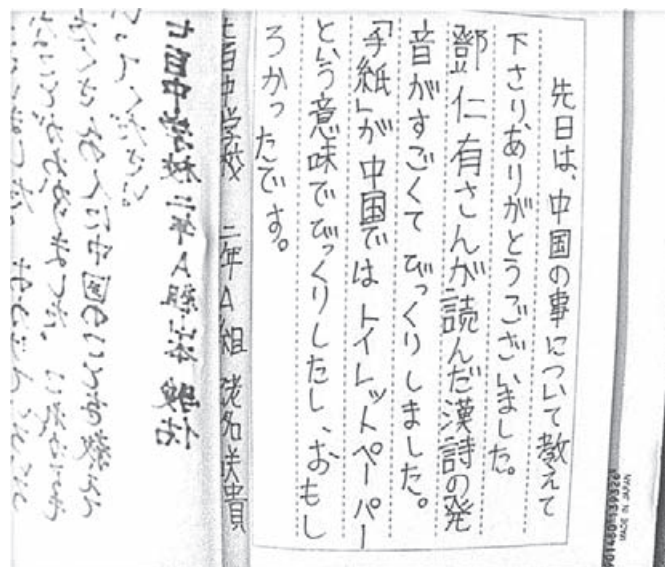
七百中学校2年生一同の手紙集

中学生対象は初めてで、ワクワクしました。先生のご案内で教室に入って、学生達の熱心で真面目な好奇心の目つきを見て、また、学生達の健康、活発で元気いっぱいの顔つきを見るとどういうわけか自信を持ちました。

最初、私の持っている大きな地図を使って、中国の概況を説明しました。それから、漢詩の中国語の詠み方とか、詩に関係する歴史や、名勝も紹介しました。杜甫の詩は四川省の成都にいた時の作品です。四川省というと皆さんは印象がないとおもいますが、マーボー豆腐という皆さん知っていますね。これこそ四川省を代表する料理です。

「三国志を読んだことが有りますか」と聞くと、漫画を読んだことがあるとか、ゲームをやったことがあるとの学生がかなりいました。「三国志」の蜀の国も四川省あたりです。パンダも日本で有名ですが、実はパンダも主に四川省に生息しています。このように説明したら、学生達が分かったような表情をしました。

講座の後半、事前に毛筆で書いた用例を使って日中両国の漢字を説明しました。例えば、中国語では「手紙」はトイレットペーパー! 「娘」は母親の意味です。中国語の「電腦」はパソコンのこと、「可口可樂」はコカコーラのことなど。その中に当時ニュースになっていた「アラ法特」をアラファト議長と当てた生徒さんには敬服します。これらのクイズは皆さん興味津々でした。やはり国が違って



学生の手紙の一部/学生部分信件

も子供達は同じ、楽しく勉強することが一番いいと思います。

漢詩講座の数日後、七百中学校から手紙が届きました。学生達全員が一枚ずつ書いてくれました。表紙にすごく綺麗で可愛い「謝謝」の漫画も描いています。「生徒も私も大変勉強になりました。生徒の手紙(トイレットペーパーではありません。笑)と写真を同封しました。」と国語の先生のユーモラスなお便りでした。私は感動しました。どうもありがとうございました。

「鄧さん頑張る・日本探検記」は、2004年から2006年の2年間、青森県六戸町の国際交流員として国際友好活動にかかわった、中国山西省太原市に住む一中国人・鄧仁有さんの日本体験です。

## 真夏の韓国低山歩き ② (2013.8.16～21)

関根 茂子

9:00 <sup>ナップチュサ</sup>法住寺料金所が現れ、その手前に山の大きな案内図と山頂の写真看板があり、たくさんの方が見上げていた。私たちほどの重装備? の人はいない。ナップサックも背負っていない人も多い。

拝観料を払って、さらに歩いていくと、いよいよお寺の山門に着く。が、お寺の見学は後回しにして沢沿いの車道を先に進む。途中の橋から川を見れば小さな魚が群れていた。

ゆるゆる登る川岸には果穂を吊り下げたシデ(ソロの木)がたくさん目についた。やっと二手の登山コース分岐着(9:48)。先に行った4人家族が登山地図看板を見上げている。ここから左・北の谷コースを上って北東の谷コースを下りに使おうという私たちの予定を指すと驚きの風だった。

(10:04) ここからは登りだ。休憩所売店があり呼び込みをしているのを横目に粛々と登る。読経の音が聞こえ、右上にお寺が見える(10:18)。ここまで車道なのだ。

結構な登り道をSさんがトップで登る。途中にも茶店が幾つも出てくる。これなら、空身でも食事や水の心配はないのだろう。私たちはチヂミや冷たい水に目をやるものの、ひたすら我慢で歩く。小尾根を乗り越し一度下ってからまた沢沿いの石段状の登山道を登る。私のゆっくりペースでもAさんが遅れだす。

なにしろ暑いのはまいった。みんなが「ここで休憩」と腰をおろすが、山頂でのスケッチ時間が欲しい私は30分に1本のマイペースを守って一人先行させてもらった。石段状の登りはつらい。途中でさっき



文蔵台

の家族を追い越す。子どもがバテ気味でお母さんと3人で登っている。お父さんはさっさと行ってしまったようだ。

かなり上がって私もひと休みしていると、家族3人が追い抜いていく。しばらく休んでもみんなの姿が見えない。やっと、Yさんが現れ「TさんがAさんに付いて後から登ってくる、今日は文蔵台(ムンジャンデ)まで登ってもとの道に戻る」とのSさんの伝言。

そこからひとふんばりで尾根縦走路に到着した。さらに石置状の道を行くと文蔵台の大きな石標があり、最後は金属階段を登って(階段下にカライトソウをひと株みつけた)縦走路分岐から5分ぐらいで大勢の登山者が景色をみている文蔵台(1028m)に登りついた(12:00)。

北東方向に花崗岩峰に松の緑が覆う観音峰(983m)が聳えたつ。それをスケッチしているとYさんが到着、Sさんも登ってきて、最後にT・A組も顔を揃える。AさんのパウンドケーキとTさんの紅茶をご馳走になり、これがお昼となった。「縦走路分岐の広場で休んでいるからゆっくり描いてていいよ」の言葉を残してみんなは下りて行く。

縦走する予定だった稜線は花崗岩峰がによきによき、松の緑が岩峰と岩峰の間を埋めている。こっちも描くぞと2枚目に挑戦するが、うまく描けなかった。

(13:10) 縦走路分岐で待っていたみんなと合流してSさん先頭で往路をマイペース下山。お休み処の冷たいものやチヂミに心を残して、16時20分発の大田行きバスに間に合わせるべく下り急ぎ、15時前



法住寺山門

にはコース図のあった二又分岐に下り着く。ここからの車道ではTさん・Yさんがスピードアップ、たちまち姿が見えなくなった。Aさんも快調の様子。わたしは下りも平地もワンギアなので、相変わらずゆっくりペースだ。暑さ負けのSさんと後ろからのんびり歩く。

(15:30) 法住寺山門前でいったんみんな合流する。お寺の拝観は時間的には無理で、諦めて歩いていくと前から棒アイスを食べながら来る人がいる。「いいな。食べたいな。」と料金所脇の売店に吸い寄せられ冷凍ケースを覗く。メロンバーを買い求め、なめながら歩く。冷たくておいしい。バスには絶対に間に合うと分かったので、急ぐ気のない後ろの私とSさんはだんだん遅れてしまった。

朝の食堂通りの店先で洗ったスベリヒユが山になっている平箒をみつけてびっくり。食べられることは知っていたが、韓国では食材として一般的なものとはおどろきだ。ゆっくり歩いても16時前にはバス停着。

Sさんが到着する前にバス切符を買っておこう。ハングルで大田を表す文字を見つけ、値段が行きと同じなのでそれを買おうとするが、相手は自動券売機、操作法が分からない。困っていると売店のおばさんが手を出してくれて買うことができた。その売店で牛乳を買ってひといきついてから、予定の俗離山16時20分発のバスに乗車。朝のおばさん3人も乗りこんだ。

大田東部バスターミナル18時着。18時20分発の儒城温泉を通るバスに乗車。儒城温泉バスターミナル19時頃着だった。

窓外を見ていると昨日探策した見覚えの街並が現れ、Yさんが日本円500円でデイバッグを買ったカバン専門店の前を通過、それからかなり先にバスターミナルがあった。やっぱり韓国の路線バスは街中で

は通りに停車しないで引っ込んだターミナルで乗降のスタイルが一般的のようだ。

温泉ホテルへ戻る道でカバン屋に入って今度は私も日本円1000円のウエストポーチをお買い物、ウエストベルトとショルダーベルトの2つが付いているのを探していたのだ。Yさんは1000円のサブザックを買った。

今夜のメニューは焼き肉と昨日から決めていた。ホテルに帰る道々、焼き肉屋を探す。と言ってもハングルでは何屋か不明。「この2階に焼き肉屋がある」とSさんに導かれ、待望の焼き肉にありつけた。出てきたのはすき焼き風の焼き肉鍋、釜炊きの黒米入り御飯、釜に付いた御飯はお湯を注いでしばらくおいてから食べるのだが、これがまたおいしかった。またしてもご帰館は8時過ぎで大浴場は明日のお楽しみとなる。

#### ◆19日(月) ケリョサン 鷄龍山<sup>注1)</sup> 登山

儒城温泉バスターミナルから東鶴寺(トンハクサ)バスターミナルまで歩けば30分ぐらいかかりそう。またバス停は2.6kmとかなり下にあって登山口まで歩くことになる。この暑さではとても歩く気にはなれず、即タクシーでの入山となった。

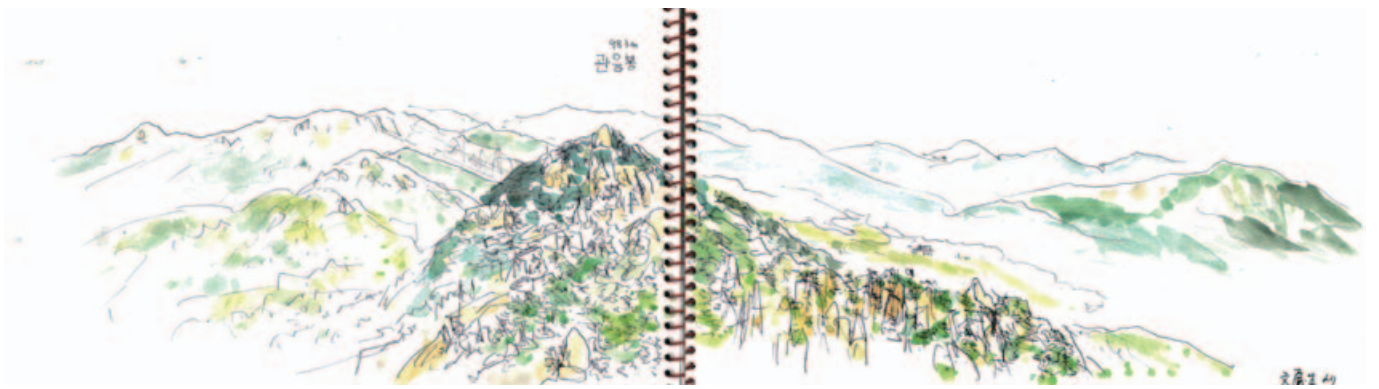
7:40乗車、途中「世界杯●●」との案内表示をみる。ワールドカップをしたサッカー競技場があるのだろう。タクシーは花時はさぞや素晴らしいだろうと思われる延延続くサクラ並木を走り抜けて8:03東鶴寺(トンハクサ)登山口へ到着。今日のタクシーはぴったり前の車について走ってきた。「料金は前の車がまとめて支払う」と運転手に言った効果とのことだ。朝食用の食料調達にコンビニまで少しもどる。店のおばさんがキンパブ<sup>注2)</sup>を手巻きで作るのを待って8:30出発となる。



文蔵台からの展望



東鶴寺のお堂の一つ



### 文蔵台からの展望、筆者スケッチ

東鶴寺溪谷といわれる沢沿いの車道に行く。樹肌をみればケヤキの木が多い。

8:59お寺の料金所があって係の人(尼寺と聞いていたのに男性)が外に立っている。登山者は無料とのこと、ラッキー！お寺の建物を山側に幾つも堀越しにやり過ぎし平らな道が終わるところで休憩する。ここからは布(ウンソンポッポ)への登りとなるので、膝に痛みがあるAさんは戻って、キンパブを買ったコンビニで落ち合うことになった。

滝までがんばるつもりで登り出す。結構きつい登りで嫌になるころ先行のYさんが待っている看板のところに着く。9:45~50ここでひと休みしていると、すぐ上からYさんの「滝の展望台があるよ」の声が降ってくる。

9:53滝といっても水はほとんどなく岩壁だった。



三佛峯ニセピークへの鉄階段

ここからがまた石段状の急坂が続き、汗が噴き出す。キンミズヒキの花や実になったタツナミソウがある。途中で1回休んでやっと尾根に登り着いた。

11:00峠の涼しい風が心地よい。先着してたっぷり休んだYさんは「体が冷えてしまった」と先行する。11:10緑濃い尾根を歩く。コナラかと思えば葉柄がない。標高800mでミズナラが生えているの？後で調べてみたらモンゴリナラ(フモトミズナラとは別物)というものようだった。

11:17展望台になっている観音峰(カンルンボン816m)に登り着く。これから歩く三佛峰(サンブルボン)方向をみれば、目下の頂にコの字の赤い鉄階段が見える。階段の下は峰の向こう側で見えない。あんな所に行くの！とビビる私は「もう、行くよー」の声にせかさながら、記念撮影よりスケッチと線描きだけでも必死にペンを走らせる。Yさん・Sさんは待ち切れず行ってしまった。(続く)

### ■注記

1) 鶏龍山：1968年に国立公園に指定された鶏龍山は、海拔845.1メートルの雄壮で山並みが美しい山です。鶏龍山という名は稜線が鶏のとさかを頭にかぶった龍の姿に似ているということから付けられた名前です。鶏龍山はいくつかの岩峰の総称であり、最高峰は天皇峰である。ほかに観音峰、神仙峰、三佛峰などがある。滝や溪流、多くの奇岩など風光明媚な自然環境であり、ハイキングコースが整備されて観光地になっている。(ウィキペディアより)

2) キムパブ：米飯を海苔で巻いた韓国風の手巻き寿司である。90年代までは普通に日本語で「ノリマキ」と呼ばれていたが、韓国国内における近年の日本語廃絶運動により「キムパブ」という呼称が推進されている。韓国語で、キム(菰)は海苔、パブ(밥)は米飯を意味する。

(ウィキペディアより)

私が初めて北京へ行きましたのが1991年、資生堂が北京麗源公司与合弁で新会社を設立した時、22年前でした。高速道路など無く空港から市街まで、ポプラ並木の道路をのんびり走りました。田園風景を味わったといえます。それ以来折にふれ在日中国人と知り合うようになりました。そこで感じたことは同じ言葉(漢字)でも「意味が違う」ことでした。日ごろ彼らの質問を受けたり、ビジネス指導したりするようになり、その違いはますます広がりを感じるようになりました。昨今の両国に横たわる諸問題の原点もその延長線上にあるのではないかと思います。しばらく拙文のテーマにしたいと思います。



中国人にとっての「愛国心」は中国魂。その変遷は…

「修身齐家治国平天下」身を治めることが、家をまとめ、国を治め、天下を平和にする(四書五経の大学：紀元前430年ごろ) 儒教精神により国民の間に根付いた。国という概念の始まりは春秋時代。周以降に周辺の西戎などの侵略で、「国」という「勢力範囲・別世界」という認識が生まれた。「國」はある地域を城壁(口)で囲み、戈(ほこ)で守る、の意。中国人にとっての愛国心とは「国を愛することは自分を愛すること」。つまり「自分のために国を愛せ」ということになる。

中国は理想のモデルを創るのが好きだ。愛国者のモデルは南宋時代の岳飛(1103～41)である。北方から侵略する金軍に身を挺して抗戦し、「民族文化と尊厳」を守るために、背中には「尽忠報国」の刺青があったという。近代の愛国者はアヘン戦争時にイギリスに抵抗した林則徐。日清戦争で講和交渉をした李鴻章は売国者の典型である。

近代の愛国者は先進国日本から学び、国を強くすると考えた康有為と弟子の梁啓超だ。国民には「民権」があり、人間にとっての「権利と責任」を認めないと愛国心は育たない。

愛国は抗日を意味する。日清戦争後の「21か条要求」に対して5・4運動が起こる。愛国が抗日に変化するきっかけとなった。今日の「靖国」「尖閣」まで続く。

愛国無罪：1936年の七君子事件に端を発する。抗日民主運動を指導した沈鈞儒や章乃器など7名を国民党が逮捕した。

「彼ら7名は国を救うために行った。彼らが有罪なら同じ様に国を愛する我々も入獄せよ」という救国入獄運動(宋慶齡一孫文夫人)を「救国無罪」と称し、「愛国無罪」の原点となる。反日デモの標語になる。



最近の日本人には「愛国心」といってもピンと来ない人が多いようです。オリンピックで国旗が掲揚されるときぐらいでしょうか。戦前の「大和魂(滅私奉公)」を思い出す方もいるでしょう。同じ漢字を使う民族でも意味が全く違います。お互いが意味を正確に理解して違いを知ることと、そ

の背景を理解することが大切ではないでしょうか。

「中国人の愛国心」王敏著(PHP新書)より抜粋しました。王さんは法政大学教授。宮沢賢治の研究でも有名です。日中の「相互理解」と「相違認識」を視点とする方です。

塩澤宏宣氏は、在日中国・台湾・香港人向け\*新聞「陽光導報」を発行の、陽光新聞社・顧問をしていらっしゃいます。一昨年年末、「わんりい」が町田市の助成により、平成23年度町田市「つながりひろがる地域支援事業」対象事業として「つなげようひろげよう地域の「輪」と「和」を企画・開催の折、読売新聞の記事をごらんになり「わんりい」の活動をご存じになりました。以来、折に触れて「わんりい」の活動を「陽光導報」で紹介下さっています。「わんりい」20周年活動記念コンサートにご参加くださり、コンサートの感想をお寄せ頂いたのを機に、「わんりい」への寄稿をお願いしました。(田井)

\*塩澤氏によれば陽光導報の大部分の読者は中国人(大陸)とのことです。

## 中国人の「愛国心」は中国魂

陽光新聞社・顧問 塩澤宏宣

ユネスコによって採択された「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」がある。人類共通のかけがえのない宝である文化や自然を、国際的に保護して行こうという取り決めだ。スリランカにはこの世界遺産に登録されている文化遺産と自然遺産が計8箇所ある。

#### 世界遺産(6箇所、数字は登録年)

1. 聖地アヌラダプーラ(1982)
2. 古代都市ポロンナルワ(1982)
3. 古代都市シーギリヤ(1982)
4. ダンブッラの黄金寺院(1991)
5. 聖地キャンディ(1988)
6. ゴール旧市街とその要塞群(1988)

#### 自然遺産(2箇所)

1. シンハラージャ森林保護区(1988)
2. スリランカ中央高地(2010)

北海道より少し小さな島国にこれだけの世界遺産が集中して存在しているのは、正に驚きである。恐らくこれだけ集中している国は他にあまり例がないものと思う(他には、マカオが東京都港区程のところに22の歴史的建造物と8つの広場を含む地域が「マカオ歴史的市街地区」として登録されているが)。これまで私はスリランカの世界遺産はすべて訪ねているが、シーギリヤやキャンディにはもう4回以上は出かけている。ゴールに至っては恐らく6回は出かけていることと思う。そこで、今回はそのゴール旧市街地を取り上げてみたい。ゴールは私の好きなところで、他の都市とはかなり雰囲気が異なり、かつての植民都市とでも言ってもよさそうな街の佇まいが気に入っている。今回の内容は今年6月に訪ねた記録を基にしている。

ゴールはコロンボから南へ列車で約4時間、インターシティバスで(高速道路を利用して)1時間半ほどかかる。行きは鉄道を利用した。スリランカの鉄道には1等車、2等車、3等車があるが、今回は2等車を選んだ。この列車には1等車は連結されていなかったが、スリランカではよくあることで、ローカル電車には連結されていないことが多い。インド洋

側の座席を選んだので、インド洋を見ながらの旅を満喫できた。

ゴールに着いてすぐトゥクトゥク(4輪タクシー)で旧市街地に向かい、予約していたゲストハウスに2泊投宿した。Ocean View Guest House という名前の通り、まさにインド洋を目の前に眺められる小さなゲストハウスである。旧市街地(フォート)内には素晴らしいホテルがいくつもあるが、どこも外国人観光客向けの、かなり高いホテルばかりなので今回は一人でもあり、安めの宿泊施設を選んでみた。

荷物を部屋に置き、早速外に出てみた。時間は夕方5時を過ぎていたので、大分涼しくなり、ちょうど散歩でもするにはよい頃合いで、城壁のある海沿いの道は地元の人のみならず、多くの観光客で賑わっていた。散歩していて驚いたのは、小中学生の団体がたくさん訪れていて、彼らの姿を見ていると、ここはスリランカの学校では修学旅行の見学地の一つになっているのかと思い至った。6時を過ぎると、真赤な太陽がインド洋のかなたに沈んでゆき、それを見ようと大勢の人が海岸で待ち構えていた。正に雄大な風景である。中には結婚記念写真を撮るカップルもいた。どんな写真が撮れただろうか。

翌日は朝食前に少し散歩してみた。まず、フォートと言えば、どんな観光案内にも載っている灯台とモスクの2箇所を訪ねてみたが、私が10数年前に初めて来た時と何ら変わらずにその優美な姿を見せていた。灯台は17世紀の半ばにポルトガル人が建立し、オランダ人やイギリス人に引き継がれていった。モスクはもともとキリスト教会で、1904年に作り変えたそうである。フォートはイスラム系の人が多く住んでいて、モスクをはじめアラビア語学校などが目に付くところである。町全体がイスラムの香りに満ちている。窓から顔を出している人々も道をゆく人々も遊んでいる子供たちも皆モスラムで、ここはスリランカなのかと一瞬疑うほどである。

一方、ここにはキリスト教会が4つもある。カトリック教会をはじめとして、英国国教会、オランダ



改革派教会、メソジスト教会とそれぞれの植民地時代を代表するような教会が存在する。もちろん今でもそれぞれの信仰は守られており、日曜日になれば礼拝があり、多くの人々が集まってくる。私も日曜日のある朝ぶらりとこれらの教会を訪ねてみた。参加者は決して多いほどではないが、バーガーと言われる人々(旧植民者とスリランカ人の混血)を始めとして、シンハラ人やタミル人などの姿が見えた。

ゴールには4泊したが、朝から夕方までひたすら歩き回った。ケラニヤ大学の学生たちが近くバス旅行を計画しているので、ゴールはいいところなので

ここはお勧めだと言ったところ、幹事の一人に「ゴールは古いものばかりで、あまり見るべきものがないのではないですか」と言われてしまい、大変驚いた。確かにそんなに見るべきものはないが、スリランカの他の都市にはない雰囲気を持つところなので、魅力的なところだと思っていた。しかし、スリランカ人にはそんなに興味を感じるころではないのかもしれない。幹事の話ではシーギリヤを検討中とのことである。そういえば、フォート内で見かけるスリランカ人観光客は少なかったような気がする。外国人観光客が目についたのが妙に印象に残っている。



### ゴールの旧市街で見つけた風景

1. フォートの街並み
2. 夕日に浮かぶ灯台とモスク
3. 教会と時計台
4. 今も残る英国王室の紋章



## 地区対抗マラソン大会

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会  
日本スリランカ文化交流協会)

コロンボから国道4号線を100kmほど南下すると、宝石の町として有名なラトゥナブラに着きます。今回の題材である地区対抗マラソン大会は、ラトゥナブラより少しコロンボ寄りの国道沿線で開催されていました。

ラトゥナブラの先にダム工事現場があったので、この辺りの道は月に何度も通る、いわゆる通い慣れた道でした。現場での打ち合わせも終わり、あとはコロンボに帰るだけです。車窓から見える景色も見慣れた物で大して注意も払わずに、この日も運転手のウダヤ君と四方山話に花を咲かせていました。ラトゥナブラを過ぎた辺りで、ふと外に視線を送るといつもと様子が少し違ってしています。いつもならば、バス停以外の場所で人だかりがある事は無いのですが、この日は交差点や商店の前等そこかしこに人だかりが出来ています。ウダヤ君に聞いても何だか判らない様子です。

しばらく車を走らせると、前方に人だかりがコックリと動いているのが見えてきました。それも片側車線いっぱい広がって、車の進行を妨げるほどの人数です。ここでウダヤ君には何が起きているのか判ったようです。あれは地区対抗のマラソンか自転車レースだろうと教えてくれました。また、しばらく車を走らせると、この動いている人だかりに追いつきました。ウダヤ君にゆっくりと追い抜くように言って、僕はこの人だかりを観察してみました。

人だかりの中心には<sup>たすき</sup>襷のような布を肩から掛けた、ランニングウェアの男性が走っているのが見えたので、マラソン大会のようです。周りの人達も襷と同じ色の鉢巻のような物を頭に巻いています。ただ、走っている男性と、周りにいる人達の雰囲気は全く違って見えます。走っている男性はスタミナ切れの様子で、足元がよろけて今にも転びそうです。これに比べると周りの人達は元気一杯で、手を振り回してピョンピョンと踊りながら走っているように見えます。これはどこかで見た事のある光景だと考えたら、ねぶた祭りのハネトそのものでした。おそらくランナーを叱咤激励しているのでしょう。皆が口々に囃し立て、鐘を鳴らしている音までが聞こえ

てきました。

この人だかりを追い越すと、更に前方に別の人が見えてきました。前の人だかりほどには人の数は多くありません。ゆっくりと追い抜きながら観察してみると、先ほどのランナーは中年男性でしたが、今度のランナーは中学生ぐらいにしか見えません。さきほどのランナーはランニングウェアを着ていましたが、今度の少年はどう見ても普通のTシャツに半ズボン姿です。襷を掛けているので、この少年が選手なのが判りました。ウダヤ君に聞いてみると、地区対抗マラソンだけでなく、色々な地区対抗スポーツでは年齢には関係なく一番優秀な選手が地区を代表して出場するのだそうです。このランナーも前のランナーと同様に、相当にバテているようです。周りの人達が叱咤激励している様子は同じでしたが、こちらではランナーの頭から水をジャバジャバとかけているのが見えました。ランナーに比べると、周りの人達が元気な理由をウダヤ君に聞いてみました。地区の人達が全コースを分けて応援するのだそうで、そのうちの何人かは全コースを伴走してしまうそうです。

最初に見た交差点や商店の前の人だかりは、一緒には走らないまでも、自分達の地区のランナーを応援するために待っていて、選手と伴走している人達の飲料水等の補給処を兼ねている様子です。自分達の地区の人だかりが遠くに見えてくると、「早く来い」とでも叫んでいるのでしょうか。皆が大声で声援を送り、手拍子を打っていました。

次の人だかりの中のTシャツのランナーはもっと子供っぽく見えたが、こちらはまだスタミナが残っているようで元気に走っています。伴走の人達の方が遅れ気味で追いかけていました。沿道から誰かがコップの水を渡しているのが見えます。次の人だかりでは、ランナーが道路に座り込んでしまい、伴走者達が心配そうに取り囲んでいるのが見えました。

更に何組かの人だかりを追い抜くと、ゴールらしき場所に着きました。まだ、1位のランナーは到着していないようです。たくさんの人達が集まって、道路

の遠くの方を見ながらトランナーの到着を待っています。僕達も車を停めて、多くの人達とトランナーのゴールを見る事にしました。暫くすると周りの人達がざわめき始めました。ずっと遠くにランナーの姿が見えていますが、何処の地区代表かはまだ視認できません。さらにランナーが近づいてくると、あの子供っぽく見えた少年だと判りました。伴走の人達を引き離して、一人で走ってきます。ゴールラインにはこの地区の人達が集まって、すでにお祭り騒ぎになっています。そして、少年がゴール。少し遅れて伴走の人達が一塊になって雪崩れ込んできました。少年はもみくちゃにされながらも、嬉しそうに何か叫んでいます。僕も何か良い物を見せてもらっ

て嬉しくなりました。

それにしても、この日は休日ではありません。平日だというのに伴走したり沿道で応援したり、多くの人達が地区対抗マラソンを楽しんでいるのが不思議でした。仕事はどうしたの？ でも、やはりこれがスリランカなんですね。

### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。

### ◆活動報告

### 中華チマキは秋が美味しい！ 〈中華チマキを作ろう会〉

2013年10月14日(祭) 場所:まちだ中央公民館・調理室 講師:郁唯(‘わんりい’中国語勉強会講師)

9月号の‘わんりい’で寺西さんが紹介下さったように、キルギスからの国土館大学留学生ケレザさんのお母さん、アジルブブさんが今年春来日して、日本に3か月滞在した折、‘わんりい’の仲間たちと何回か一緒に料理を作って交流した。‘わんりい’中国語勉強会の講師でいらっしゃる郁唯先生も毎回参加され、その折、中華チマキの話が出て、今回の催しになった。

中華チマキは一言でいえば、「水に浸したもち米と具を笹の葉(又はタケノコの皮)にしっかりと包んで茹でる」だけの点心だが、長時間茹でる間に、“笹の葉に包んだもち米が外にこぼれないよう”に包むところにコツがある。必要材料の分量の確認と、笹の葉の扱いを事前に記録してレシピに掲載する為に事前講習をした。

先生の手はいとも簡単に、笹の葉でもち米と具を三角に包み、包んだ笹の葉に全く隙間がない。が、さて、我々の方はといえば、三角の頂点のどこかでもち米がこぼれだし悪戦苦闘した。しかし、先生に手を取って頂き、先生の手つきを真似ていくつか作っ

ているうちにどうにか形になり、ゆで上がったチマキはとても美味しかった。

当初の予定では、15名の参加者を募集予定だったが、事前講習の体験から、募集人数を10名に減らし本講習に臨んだ。そんな訳で参加者数は、いつもより少なめだったが、参加の皆さんはきちんと包み方をマスターしたかと思っている。

中華チマキは具入りで美味しい上、冷凍保存もできる。不時の準備に備えられるし、不意の客にも出して話題提供にもなるにちがいない。当日は栗入りの肉チマキと小豆とナツメ入りの甘い味のチマキを作ったが、詰め物は、各人各様工夫を凝らしてオリジナルのチマキが楽しめる。

大学の授業が終わってから参加の留学生2名も加わり、茹で上がったチマキと、中国家庭料理風のスープとサラダ、女性の肌に良いといわれる薬膳風‘白きくらげとナツメと蓮の実のデザート’で参加者一同会食した。

(報告:田井)

(\*チマキの包み方を、近く‘わんりい’のHP・料理講座レシピに掲載します)



## サハ共和国・ヤクーツクだより ⑥

杉嶋俊夫

前回に引き続き、現地で体験したことを記していきます。

ロシアも、五月上旬はゴールデンウィークです。ヤクーツクでもメーデーを皮切りに市内のあちこちの施設でイベントが行われました。中でも私が感心したのはアニメ・ノンストップという催しです。深夜に始まる日本アニメ上映会でしたが、単なるレイトショーではありませんでした。5作品ほどの上映の合間に、クイズ、ゲーム、キャラクターのものまねコンテストなどが行われ、大量の豪華な賞品が振舞われました。若い観客たちが舞台上に上がって心から楽しそうに参加していました。このイベントはアニメを愛好する10代の若者が、5年以上前から毎年、企画・運営しており、スポンサーはまったく儲けゼロで賞品を提供しているそうです。

翌日、市内にある児童センターを覗いてみたら、ちょうど子ども芸能大会が始まるころでした。サハ共和国の各地から集まった子供たちが踊り・歌・ホムス(口琴)演奏などを競いました。優勝したのは和太鼓の音楽に合わせて踊った、市郊外にある町の子供たちでした。ヤクーツクだより第2号(‘わんりい’184号)に写真が載っています。

同じ日の夕方、市内の立派な競技場を使って「歌の日」と呼ばれるイベントが行われ、様々な世代のプロ・アマチュア歌唱グループが出場しました。大半はサハ共和国内からの参加で、サハ語の歌が多かったのですが、ロシア民謡アンサンブルや中央アジアからのゲストも来ていました(写真1)。

翌週、外国人教師・留学生らと市の北側を流れるレナ川の流氷を見に行きました。前月に凍ったレナ川を自動車で渡って自然公園に行ったのですが、その頃は分厚かった氷も、すでに割れ、直径5m前後の塊が無数に浮いていました。残念ながら浮いているだけで、氷が流れるところは見られませんでした。その時の写真も、たより第2号に載っています。

もうこの時期になると夜の闇の時間は短くなり、夜10時頃まで外が明るくなります。前号で「書物の夜」のイベントについて触れましたが、5月中旬

には「美術館の夜」というイベントに参加しました(写真2)。

プログラムは、展示の解説、サハ映画上映・監督との交流会、クラシック音楽演奏、地元若者グループのライブ演奏といった内容で、私は伝統工芸の解説を楽しみにして行ったのですが、ロシア語で解説が始まったと思ったら「ロシア人のお客様はいらっしゃいませんね、では、サハ語で。」と言われてしまい、何もわからぬまま展示物を眺めるしかありませんでした。

5月の末、日本で研修を受けたサハ人調理師たちによる報告会兼試食会が行われました。サハの各地から選ばれた10人の調理師が日本料理の研修に参加したのです。代表以外は全員女性でした。市内にも数軒、日本料理店と名のつくお店はありますが、その日、私は初めてヤクーツクで「日本料理らしい日本料理」をいただいたのです。

翌日は、オリガ・パドゥルージュナヤという若い女性の口琴演奏ライブを聴きに行きました。彼女は、音楽学校で西洋音楽の教育を受け、口琴と出会ってプロの口琴奏者となり、数年前まではアヤルハーンという女性口琴トリオの一人として活躍していました。民族的にはウクライナ人で、サハの村で、サハの言語と文化にどっぷり浸かって生まれ育ったというちょっと変わった経歴の持ち主です。私が聴きに行ったライブでも素晴らしい演奏を披露してくれました。

6月初旬、極北芸術文化大学の学生たちのお芝居を鑑賞しました。この大学には伝統芸能専攻のほか、西洋音楽や演劇の専攻があり、私が観たのは演劇専攻の最終学年の卒業発表でした。(ロシアでは年度は秋に始まり、夏に終わります。)この大学の演劇教育のレベルは非常に高く、実際に多くの優秀な俳優を輩出しています(写真3)。

数日後、北東連邦大学付属の博物館で始まった「さむさのあたたかさ」と題する展覧会を観に行きました。これはフランスの大学と北東連邦大学との合同プロジェクトで、サハやロシア在住のアート作

家らが北方をテーマにした作品を出展しました(写真4)。

次号では、6月中旬以降に体験したことを、夏至祭りを中心にして記したいと思います。

11月9日(土) 13:00 ~ (小田急線泉多摩川駅徒歩3分)日本シルクロード文化センターの講座で杉嶋俊夫さんが、ヤクーツク滞在中の話をします。詳細は、日本シルクロード文化センター (<http://silkroad-j.lomo.jp>) HPから、左側メニューの「シルクロード講座」にあります。



1

### 歌の日

サハではソ連崩壊以降、積極的に伝統文化とサハ語の復興を行いました。いま、歌は、サハを代表する文化の一つになっています。この催しには小さい子供から高齢の方に至るまで様々なグループが出場しました。



2

### 極北芸術文化大の演劇

卒業発表の演目選ばれたのは「モーグリ」(英国の小説『ジャングル・ブック』)。演技のすばらしさはもちろん、観客のすぐ近くで激しく動き回っていたため出演者がみな大きく見えたのが印象的でした。



3

### 美術館の夜

普段は市内の喫茶店で行われている無料映画上映会が、この「美術館の夜」のプログラムの一つとして行われました。サハ映画もいまやサハの立派な文化の一部です。写真左側に立っているのは上映会の主催者。サハの過去と現在を知る、活動的な女性です。



4

### さむさのあたたかさ

絵画、写真、彫刻、オブジェ、衣服など、北方地域の自然環境と、その中で育まれた感覚に基づいたユニークな作品がスペースいっぱいに展示されていました。次回はフランスの作家との合同で、屋外にも展示して、よりユニークなコンセプトのイベントにしたいと主催者は言っていました。

### 【'わりい'の原稿を募集しています】

'わりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又'わりい'の活動についてのご希望やご意見及び'わりい'に掲載の記事などについても、簡単な感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル 'わりい'

**平島克子油絵展『「史記」の世界を訪ねて—周原から茂陵へ—』**

場所: 町田市民ホール・第二ギャラリー(☎042-728-4300)

2013年12月5日(木)~10日(火) 10:00~18:00(最終日:17:00まで)

問合せ:042-727-9307(平島) \*平島さんは'わんりい'会員です。応援よろしく願います

**油絵展『「史記」の世界を訪ねて—周原から茂陵へ—』によせる私の思い 平島克子**

1984年以来、中国陝西、山西、河南を旅して黄土地方とそこに暮らす人々を描いてきましたが、ずっといつかは歴史上の人々や事柄を描きたいと思っていました。子供のころからの「三国志物語」に始まった中国史への関心は次第により古い時代のものへと遷っていきました。

司馬遷自身とその「史記」に登場する人々は私にとってとはとても素晴らしく魅力的で、もう孔子、劉備、関羽その他の人たちは比べようがないものになっていました。

2007年に「西安と五丈原を訪ねて」の展覧会後はもう「三国志」とは離れることにしました。2010年「臥薪嘗胆の地を訪ねて」で初めて司馬遷の世界にチャレンジしました。もっとその世界に近づいて行きたいとの思いから、又、山西、陝西を旅し、2012年には初めて湖南、湖北を訪れました。青年期の司

馬遷が旅したほんの一部でも体験してみたいと思ったからです。そして今回『「史記」の世界を訪ねて—周原から茂陵へ—』と題する展覧会を開くことになりました。

絵以外に地図や歴史上の細かい説明文などがあります。又、当時の人を想像して描いたものもあれば、古代の戦いの地や華やかだった筈の都が静かな村や、ただの荒地でしかないそんな今の風景をも描いています。テーマによって描き方もまるで違っているのでバラバラの感じがします。本来の油絵の展覧会とは違うかもしれませんが、絵を描く事と同じくらいに、古代の世界を旅する事が好きなためこのような型を取ってしまいました。

私自身、文章、絵の表現共にとても稚拙だと感じていますどうぞご容赦頂いて、数々の歴史の物語を時代を追ってご覧頂ければと思います。

**日本スリランカ友の会**

**スリランカで鳴り響いた「和太鼓公演」報告会**

和太鼓奏者8名を引き連れてスリランカで公演の報告と現地の様子を映像と共に語る

2013年12月1日(日) 16:00開演(15:30開場)

**会場: 東京ビジネスホテル**

東京都新宿区新宿6-3-2/☎03-3356-4605、地下鉄新宿御苑前(1番出口)/都営新宿線「新宿三丁目」(C7出口)徒歩7分

- 会費: 4,000円(ドリンク・食事)
- 問合せ & 申込: 日本スリランカ友の会 ☎045-663-7625

ようこそ、リアルなミャンマーへ

**ミャンマー祭2013(雨天決行)**

激動するミャンマーの今を知ろう!!

<http://myanmarfestival.org/>

2013年11月17日(日) 10:00~16:00

**会場: 浄土宗大本山増上寺境内 参加無料**

東京都港区芝公園4-7-35/JR・東京モノレール浜松町駅徒歩10分

- ミャンマー・シンポジウム
- 日本・ミャンマー交流写真展
- ミャンマー市場(伝統工芸品・ミャンマー料理・ワークショップなど)
- ◆問合せ: ミャンマー祭2013実行委員会 ☎03-3436-3353

**映画「自由と壁とヒップホップ」(94分、2008年)パレスチナ・アメリカ合作**

サンダンス映画祭 ドキュメンタリー映画部門 出品/アムステルダム映画祭 DOC U!賞 出品/フランス女性映画祭 観客賞(最優秀ドキュメンタリー)受賞/バイルート国際映画祭 観客賞最優秀作品、最優秀監督賞 ダブル受賞ほか受賞歴多数

監督: ジャッキー・リーム・サッローム 11月末より渋谷イメージフォーラムで上映予定 [http://www.cine.co.jp/slingshots\\_hiphop/](http://www.cine.co.jp/slingshots_hiphop/)

パレスチナから胸の痛むニュースが今でも報道される。しかし問題のありかがあまりにも複雑で、私の理解を越え目を背けていたくなる。イスラエルがめぐるした巨大なパレスチナとの分離壁の映像はむごい。が、その向こうでも子供は生まれ育って行く。ヒップホップと出会ったパレスチナの若者たちが、音楽の力を使い、自分たちを発信することを知った。音楽はあらゆる分断を越え、ネットに載って世界と繋がってゆく。監督は、パレスチナ人とシリア人の両親を持ち、ニューヨークを拠点に活動しているアラブ系アーティスト。この映画撮影では様々な困難にぶつかり、5年の歳月を費やして作成されたとのことだ。 (田井)

# 第16回 町田発国際ボランティア祭 2013 夢広場

## この星に平和と希望を



▲日時:12月8日(日) 10:00~16:00

▲会場:町田市民フォーラム・3F全フロアー(ホール、視聴覚室、調理室、和室ほか)

国際支援と友好活動をしている町田市と町田市周辺のボランティア団体が集結の、恒例「夢広場」。今年はこれまでと様子が変わる。

「町の駅・ぼっぼ町田」改装の為、今年は試験的に、町田市民フォーラムの3F全フロアーを使用しての開催になった。従って、これまでは仮設舞台での出し物も本格的ホールの舞台が使われる。視聴覚室、調理室、和室それぞれでも趣向を凝らした催しがある。是非ご参加を!

- **ホール** 海外の踊りやパフォーマンスいろいろ **入場無料**  
(特別プログラム:オペラ歌手・崔宗宝さんの歌と国土館大学のキルギス留学生・ケレザさんのコムズの演奏)
- **視聴覚室** 国際支援のお話とビデオ上映 **参加無料/28名**  
(なるべく申し込みを。[町田国際交流センター] FAX:042-722-5330)  
\*参加者に、わんりい特製・手作り月餅試食券を進呈します。  
①日本に逃れてきた「難民」の話 11:00~12:00 認定NPO 法人難民支援協会  
②日本と雲南を繋ぐ教育支援活動 14:00~16:00 認定NPO 法人日本雲南聯誼協会
- **調理室** ワークショップ 世界の味に挑戦しよう!  
1.キルギスの手延麺・ラグ麺 2.スリランカのスナックと高級茶の試飲  
3.手作り月餅(3種類の月餅を作ります) **参加:各500円 20名(要申込み)**  
FAXで、参加希望の講座名・住所・氏名・参加人数を町田国際交流センターへ、FAX番号:042-722-5330
- **和室** 抹茶の頂き方体験 参加:300円(抹茶と和菓子代)
- **フロアー** 民芸品・写真の展示と販売
- **主催:2013 夢広場実行委員会**
- **共催:(財) 町田市文化・国際交流財団**
- **問合せ:☎ 042-722-4260 町田国際交流センター**



わたしとスリランカの衝撃的な出会い

### ジャズファンタジー

ジャズとスリランカ舞踊の協演

◆ **会場:ギャラリー・アレイホール (Alleyhall)**

東京都世田谷区北沢2-24-8 下北沢アレイビル 3F  
小田急線・下北沢駅北口 (alleyhall@nifty.com)

◆ **月 日:2013年11月17日(日)**

◆ **開 演:14:00(開場13:30)**

◆ **参加費:4000円**

**第一部 ジャズ**(演奏 ケイコ ボルジェソン)

スリランカに思いを込めたオリジナル曲

**休憩タイム**-今年9月収穫の、スリランカ最高級茶・ウバチャとお菓子で交流

**第二部 キャンディアンダンス**

(踊りスタンタ・スラセーナ)

◆ **主 催:NGO アジア草の根支援交友会**

◆ **申込み&問合せ:**

☎ 042-708-8977 携帯090-6706-5468 (高橋)

### 「ベトナム版画展」

中国年画の影響を受けたベトナム版画を約100点展示。

埼玉県山西省友好記念館

しんいかん  
**神恰館\***

〒368-0201 埼玉県秩父郡小鹿

野町両神薄2245

11月2日(土)~12月23日(月) 9:00  
~ 17:00

▲ **入館料:一般200円**  
小中学生120円

▲ **問合せ:山西省友好記念館**  
☎ 0494-79-1493



\*神恰館は平成4年、埼玉県と山西省の友好締結10周年を記念して建てられた。正式名称は「埼玉県山西省友好記念館」。外観は唐代寺院建築風の造りで、館内では山西省を中心とした中国の文化を紹介している。「神恰館(しんいかん)」は愛称である。  
(神恰館ホームページから抜粋)

◆わんりいの催し

## ‘わんりい’の秋の恒例の催し、手づくり月餅の会

焼き立ての香ばしい三種類の月餅を作って頂きましょう！ お土産付きです。

年々、研究を積んで美味しくなる月餅です。是非、焼き立ての香ばしい月餅のご賞味を！  
ご参加、お待ちしております。

- 場所：まちだ中央公民館 6F・調理実習室 東京都町田市原町田6-8-1  
小田急線町田駅南口 徒歩5分/JR 横浜線町田駅ルミネ口徒歩3分
- 月日：2013年11月11日(月) ● 時間：13:00～15:30
- 会費：1500円(会場費・材料代など\*お土産付き) ● 定員：先着15名
- ◆ 申込み：☎050-1531-8622(わんりい) E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp



中国伝統芸能「京劇」に日本人が本格的に挑戦！◆入場無料(途中入退場自由)

新潮劇院京劇教室 & 洪剛鑼鼓教室(\*鑼鼓教室には‘わんりい’の仲間多数加わっています。皆さん、応援を！)

## 第四回京劇教室・鑼鼓教室合同発表会

[上演予定] 虹霓関こうげいかん / 秋江しゅうこう / 霸王別姫はおうべっき / 林冲夜奔りんちゅうやほん / 盜御馬とうぎよば

写真撮影：木村武司



- ◆ 月日：2013年11月23日(土)
- ◆ 時間：14:30開場/15:00開演(19:00終演予定)
- ◆ 会場：新宿区・角筈ホール(京王線「初台」・大江戸線「都庁前」徒歩10分)
- ◆ 主催：新潮劇院 (<http://www.shincyo.com>)
- ◆ お問い合わせ：新潮劇院 ☎/FAX: 03-6411-5404

◆わんりいの催し

## 中国語で読む・漢詩の会

- ▲ 場所：まちだ中央公民館
  - ▲ 月日：11月3日(祭)学習室7  
12月15日(日)音楽室2
  - ▲ 時間：10:00～11:30
  - ▲ 講師：植田渥雄先生(現桜美林大学孔子学院講師)
  - ▲ 会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
  - ▲ 定員：20名(原則として)
- \*録音機をお持ちの方はご持参下さい。
- ◆ 申込み：☎050-1531-8622(有為楠)  
E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(同上)



## ‘わんりい’ 188号の主な目次

北京雑感(79)パラリンピック	2
諺・慣用句(24)「喪家の狗」	3
媛媛讲故事(58)「南柯太守の夢Ⅲ」	4
雑記帳「映画『そして父になる』を観て」	5
中国-城市めぐり(28)「哈爾濱市」②	6
友好の原点を刻む中日友好園林	9
日本探検記(7) 初の文化祭・書の展示	10
日本探検記(8) 七百中学校にて漢詩講座	10
真夏の韓国低山歩き(2)	12
中国人の「愛国心」は中国魂	15
スリランカ・ケラニヤ便り⑦世界遺産の地・ゴール	16
スリランカ紹介(72)「地区対抗マラソン大会」	18
‘わんりい’ 活動報告「中華チマキを作ろう会」	19
サハ共和国・ヤクーツクだより⑥	20
‘わんりい’ 掲示板	22・23・24

◆わんりいの催し

## ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!

- ◆ 動きやすい服装でご参加ください
  - ▲ 場所：まちだ中央公民館・6F視聴覚室
  - ▲ 月日：11月12日(火)と12月17日(火)
  - ▲ 時間：10:00～11:30
  - ▲ 11月の練習歌「花は咲く」④
  - ▲ 講師：Emme(歌手)
  - ▲ 会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
  - ▲ 定員：15名(原則として)
- ◆ 申込み：☎042-735-7187(鈴木)  
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(田井)



### 【11月の定例会と12月号のおたより発送日】

- ◆ 定例会：11月7日(木)三輪センター第3会議室  
13:30～
- ◆ 12月号のおたより発行日：10月30日(水)  
三輪センター第3会議室 11:00より発送準備

◆まちだ中央公民館 小田急線南口・横浜線ルミネ口徒歩5分 町田市原町田6丁目8-1 町田センタービル 109